

□ 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。
(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

私が初めてコミュニケーションワークショップ「聴き方教室」を開講したところ、聞き方に関する本を随分探しました。ところが本屋に並んでいるのは、すべてが話し方に関する本で、聞き方に関する本はなかなか見つかることができませんでした。聞き方について書かれているのは、カウンセリングに関する本だけです。私はとくにカウンセリングという限られた領域だけではなく、広範囲に「聞く」ことを学びたいと思っていました。二年程前に、ようやくタイトルに聞き方のついた本を見つけて喜んで買いましたが、中身はやはりほとんどが話し方で、聞き方についてはほんのちよつと書いてあるだけでした。どうやら①コミュニケーションは聞くことから始まるという考え方は、あまり一般的ではなかったようです。さらに聞くという行為は、私たちが学ぶことができる「技術」として認識されていなかったのです。「聞く」ことは心の問題であり、それは心理学や精神的な領域と捉えられてきたのです。ところがいまその認識が大きく変わりつつあります。

聞くことは話すことと同様の技術であり、話すことと同等、またはそれ以上にコミュニケーション能力として重要なものであると私は考えます。話す力は、私たちの理解力と比例しています。そしてその理解力は、聞くことにより、周りの情報をどれだけ取り入れることができるかによって決まってきます。

人の話に耳を傾けない人は、自分の考え方のみを信じているので、おのずとその理解力は制限されたものとなります。したがって、制限されたところからAハッシンされる話も柔軟性に欠けるものとなるでしょう。まるで酔ったかのように、自分の知識を話し続ける人に、うんざりしたことはありませんか？

一方、人の話をよく聞く人は、異なる価値観を吟味し、受け入れる努力をします。人の話を聞くときは、相手を理解しようと耳を傾けるので、自然と人に対する洞察も深まります。単なる批判や判断を避け、異質なものを一つの見方として自分の中に取り入

れます。このような聞き上手がいったん話す側に回ると、非常に説得力のある話し手となることができます。「ア」聞く努力は、自己革新の努力です。常に自分を成長させ、より深い知恵を身につけたとき、伝える技術を高めることができるです。聞き方を、「②」と触れがたいところに押しやらず、積極的に学べることで取り組んだとしたら、それはおのずと伝える技術の向上を促進することになるのです。「イ」

聞くことの難しさは、相手の言葉を聞く以前に、自分の言葉を聞いてしまっているということにあります。③自己内コミュニケーションです。私たちの心の中には生まれてこの方、長年かけて作ってきた自己内コミュニケーションがあります。私たちの人生を支配している「観念」です。観念は自分に対して、人に対して、物事に対して、あらゆる出来事に対して、「こんなものだ」という判断を下している思考の習慣です。「初対面の人に、観念なんてもちようがないじゃないか」と思うかもしれません。でもその瞬間でさえ私たちは、過去のデータを検索し「この目線の鋭さ、これはBユダンのならない人だぞ、心を開くと危険だぞ」と自分言い聞かせます。もちろん自己防衛は、社会で生きていく上においてとても重要な知恵ではありません。しかし、それによって人間関係が妨げられていることもたくさんあるのです。「ウ」

そして、観念は人の話を聞くときにも働いています。あなたが「興味深く素敵だな」と思う人の話を聞くと、「たいしたことがないな」と思う人の話を聞くと、聞こえてくるものが違うのです。「エ」また考え方の違う人の話を聞くのも大変難しいものです。聞いているその瞬間にも、「いいや違う」と思って聞いていますから、相手が「聞いてもらった」と感じる聞き方は非常に困難なのです。それどころか、私たちは人の話を「まったく聞いてはいない」と言ってもCカゴンではありません。さらに問題は、人の話を聞いていないとき、問題が解決しないだけではなく、私たちの知恵が深まらないところにあります。「オ」

私たちは観念という名の独特なメガネと翻訳器を耳につけて生きています。④そのメガネを通して見ているのは「色のついた」

相手であつて、あるがままの相手ではありません。私たちに聞こえてくるのは、翻訳器を通して自分勝手に解釈した言葉であつて、相手の気持ちをそのままを聞いている訳ではないのです。私たちは相手を見てはいません。私たちは相手を聞いてはいません。私が見ているのは、私のメガネに沿った相手で、私が聞いているのは、私の翻訳器が正しいと判断する内容だけなのです。

私には私の正しさのみを聞こうとする耳があり、相手には相手の正しさのみを聞こうとする耳があります。これでは、コミュニケーションが難しいのは当たり前です。だから人間関係は難しく、人の心をつかむのは一大仕事となるのです。それでは、どうしても、その難しさを乗り越えて、コミュニケーション能力を自分の味方につけることができるのでしょうか？ それは、単純に自分勝手な耳に気づくことです。『自分勝手な聞き方』に気づくことができれば、それを変えることはそう複雑なことではありません。

ある経営者Mさんがこんな話をしてくれました。会社を設立して三年間、多くのスタッフが会社を辞めていったそうです。当時のMさんは自分の考え方や見方を一生懸命スタッフに伝え、スタッフがそのように動くことを望みました。経営者としてスタッフに指示を出すのは、当たり前と言えども当たり前の話です。ところがスタッフは居つきませんでした。スタッフにはそのやり方が受け入れられなかったのです。

ところがあるとき、Mさんはスタッフにはスタッフの答えがあることに気づきます。そして彼らの答えに耳を傾けるようになったのです。ああしろ、こうしろではなく、「どうするのがいいだろう？」と相手に下駄を預けるようになりました。どうしてもスタッフにいい考えがないときにだけ、「こういう考え方もあるよね」と彼の考えも披露しますが、最終的に何をどうするかを決めるのはスタッフです。

そのやり方を学んでは、人が会社を辞めなくなったとMさんは言います。最初、Mさんが指示・命令でスタッフを動かそうとしたとき、スタッフは抵抗を示しました。ところが、スタッフ自身が何をしたいのかを聞くと、彼らは自分からやる気を起こし、会社の業績は成長し始めたのです。

そのプロセスでMさんは葛藤したことでしょう。Mさんは天才肌で、自分の考えをきちんともっている優秀な人物です。創造的な仕事のやり方がわかるからこそ、それをスタッフにも学んでほしいと自分のやり方を一生懸命伝え、彼らがその通りに動くことを望んでいたのです。

聞き方を変えることは複雑なことではありません。しかしそれは、自分と相手を完全に信頼することを意味しています。「やらせてやつても自分は大丈夫」「任せても彼は大丈夫」と自分と相手を信じていることです。複雑なことではありませんが、簡単なことではありません。それは、相手のあるがままを受け入れることなのです。

Mさんの会社は上場を目指して順調に成長しています。Mさんは聞き方を変えて、社員の信頼と会社の成長という欲しいものを手に入れたのです。

人間も組織も常に成長を望んでいます。会社であれば、安定した業績を上げて働く人々の生活を守りたいと考えます。個人であれば常に幸せを望んでいます。それを実現する基本中の基本がコミュニケーションです。しかも⑤相手の話をどう「聞く」ということのなかに⑥答えはあります。ところがそのとき、私たちが翻訳器付きの耳しかもっていなかったら、私たちは人々と一体となつて成長するチャンスを失ってしまいます。

自己内コミュニケーションに関しても、本当に大切なことは何かを聞き分ける耳をもつことが必要です。間違つた考えに耳を傾けてしまつては、せつかくのチャンスを逃してしまうことになるのです。

（『聞く技術・伝える技術』 菅原 裕子）

〔注〕 *1 下駄を預ける＝すべてを相手に頼んで一任する。

*2 プロセス＝過程。

問一 ―線A「ハッシン」・B「ユダン」・C「カゴン」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいにはつきりと書くこと。)

問二 本文からは次の一文が省略されています。どこに入れるのが正しいですか。最も適当な箇所を文中の「ア」「イ」「ウ」の中から一つ選び、記号で答えなさい。

《 自分自身を成長させたり、自己革新するための情報が入ってこないのです。 》

問三 ―線①「コミュニケーションは」という考え方」とありますが、この考え方に当てはまるものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 聞くことにより周囲の情報を幅広く取り入れることは、他者への理解力のみならず話す能力の向上にもつながるものであるということ。

イ 周囲の情報をうまく用い、批判精神を失うことなく相手と向き合うことは、聞く技術や話す技術における根本的な姿勢であるということ。

ウ 話す能力以上に聞き方について注意を払い、自分の考えを冷静に分析することは、コミュニケーションを円滑にするための出発点であるということ。

エ 様々な意見に耳を傾け知識を増やし、その上で相手を説得する力を養うことは、対人関係を上手に築いていく知恵であるということ。

オ 聞き取った情報をうまく活用し、人の話を正しく理解しようとすることは、コミュニケーションにおいて必要不可欠な姿勢であるということ。

問四 空らん「②」に入れる言葉として最も適当なものを本文中から五字以内で探し、抜き出しなさい。

問五 ―線③「自己内コミュニケーション」とありますが、その説明として当てはまらないものを次のア～オの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 自己内コミュニケーションは人間関係を良好にしていく社会生活上の知恵である。

イ 自己内コミュニケーションは個人が長年かけて作ってきた思考の習慣である。

ウ 自己内コミュニケーションは相手が初対面の人であっても生じるものである。

エ 自己内コミュニケーションは相手の話を正しく聞くことを困難にしがちなものである。

オ 自己内コミュニケーションは人を観察する際にも話を聞く際にも生じるものである。

問六 ―線④「そのメガネを通して見ているのはあるがままの相手ではありません」とありますが、「そのメガネを通して見ている」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手の未来の姿まで見ているということ。

イ 相手が隠している部分まで見ているということ。

ウ 先入観を持って相手を見ているということ。

エ 何も考えずに相手を見ているということ。

オ 努力して相手を肯定的に見ているということ。

問七 ―線⑤「相手の話をどう『聞く』か」とありますが、筆者はどのような聞き方を良い聞き方と考えていますか。三十字以内で答えなさい。

問八 ー線⑥「答え」とありますが、それは何に対する「答え」ですか。その内容として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 個人や会社におけるコミュニケーションの役割はどういうものかという問いに対する答え。

イ 個人と会社が一体となって発展を目指すための基本は何かという問いに対する答え。

ウ 人や組織においてなぜコミュニケーションが重視されるのかという問いに対する答え。

エ 人はコミュニケーションにおいてどのような点に注意すべきかという問いに対する答え。

オ 人や組織を成長させていくためにはどのようにすればよいのかという問いに対する答え。

問九 本文の内容として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一般に聞くことは話すこと以上に難しいものであり、努力して自己革新をしていくという強い意志なくしてはその能力が開花することはないのである。

イ 人は他人の本当の姿や言葉の真意を正しく把握することは難しいが、自分の認識の間違いに気づくだけでも相手に対する理解力は深まるものである。

ウ 人間関係を円滑にしたいと願うならば、言葉の扱い方はあくまでも一つの技術であるので、練習さえすれば誰にでも習得可能なものだという認識を持つべきである。

エ コミュニケーションにおいては聞く技術を高めることが大切であり、そのことが自分の成長のみならず豊かな人間関係の形成に役立つのである。

オ 人の心をつかむのは容易ではないが、辛抱強く相手の話を聞く機会を重ねていくうちに、しだいにその人の真意がわかってくるようになるものである。

二 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする)

青海学院高校の放送部は高校一年生の宮本正也以下三名の活躍で、JBKの主催するコンクールで、ドラマ部門において全国大会出場が決まり、東京のJBKホールで作品が放送されることになった。しかし学校の決まりで、東京に行けるのは一部門につき五人までとなっている。高校三年生は最後のチャンスであり、五人全員で東京に行けるものとはしゃいでいる。僕は三年生の様子に違和感を覚えている。

【登場人物】

三年生	月村部長	アツコ先輩	ヒカル先輩	ジュリ先輩	スズカ先輩
二年生	白井先輩	シノウサイ先輩	ラグビー部先輩	ミドリ先輩	
一年生	宮本正也	僕(町田くん)	久米さん		

東京行きの話を、月村部長はどう切り出すのだろうと、緊張感を持ってミーティングに臨んだはずなのに、ケーキを食べているあいだは気を緩めてしまっていた。気まずい話はそういうときに、突然始まるものだ。

「これ、サイコー」

スズカ先輩が三層に分かれたチーズケーキを食べながら、うっとりした表情でつぶやいた。どれどれ、と両隣のヒカル先輩とジュリ先輩が、そのケーキに自分のフォークを刺して、一口すくった。

「そういえば、昨日、ネットでちよつと調べてみたんだけど、JBKホールの近くに美味しいチーズケーキのお店があるんだって」ジュリ先輩が言った。

「えーっ、行きたい。みんなで行こうよ。それくらい自由時間ってあるよね？」

アツコ先輩がはしゃいだ様子で「A」を挟み、月村部長に訊ねた。

「うん、まあ……」

①曖昧に部長が頷いたそのときだった。

「それ、本気で言ってるんですか？」

厳しい声が響いた。

正也の友だちでも同級生でもない。だけど、正也を全国大会に連れて行かないのはおかしいと思っている。そして、②間違ったことは正さないといけない。そう考えているのだろうか。

白井先輩が立ち上がった。

「おとといは、先輩たち、「B」極まって深く考えずに、みんなで東京に行けるって喜んでいてたんです。だけど、今日になってもまだそう思っているなんて」

白井先輩の剣幕に押され、三年生の先輩たちは全員、フォークを置いた。

「できれば仲良し五人組全員で行きたい。その気持ちはわかります。でも、『ケンガイ』は宮本くんがいたからできた作品です。どうして宮本くんが行くという選択肢を、勝手に外しているんですか？」

三年生の先輩たちは皆、俯いてしまった。だけど、今日ばかりは同情しない。そうだ、と口には出せないけれど、僕は大きく頷いてみた。

「だって、毎年三年生が行ってるし……」

アツコ先輩がモゴモゴと言い返した。さっきまでの歯切れの良さはどこにもない。

「それは、三年生が中心になって作ったからじゃないですか」

白井先輩の言うことはいつも正しい。アツコ先輩は黙り込み、他の先輩たちも口を開こうとしない。

ガマン大会だ。

三年生の先輩たちは皆、正也が一番貢献したことくらい理解している。だけど、それを少しでも口にして、話し合いが持たれることになってしまうと困るのだ。一人外れる誰かを、決めなければならなくなるのだから。

私が行かなきゃいいんですよ！　なんて気持ちを高ぶらせて、うっかり逆切れでもしてしまったら、即アウト。これ幸いと言わんばかりに周りは、ゴメンね、と泣きながらも、胸をなで下ろし、話を終わらせてしまいうに違いない。

③黙っているのが一番。ズルイやり方だ。

(中略)

「黙っていても解決しません。話し合いをしようとしてもしないなんて。④そんなふうだから、自分たちだけでは、マトモな作品が作れないんですよ」

白井先輩は容赦ない。ちよつとそれは、と隣でシウサイ先輩が窘めたものの、白井先輩は三年生の先輩たちを睨みつけたまままだ。

⑤……ドキュメント部門も、どっちか通過していればよかったのに」

アツコ先輩がつぶやいた。普段おしゃべりな分、黙り続けていることに耐えかねて、つい、うっかり、本音を漏らしてしまったのだらう。決して、反撃するつもりで言ったのではない、はずだけど……、それはダメだ。

バン！　と白井先輩は両手をテーブルに思い切り打ちつけると、まだケーキの残っている紙皿をアツコ先輩に向かって投げつけ、放送室から出て行った。

幸い、白井先輩が投げた食べかけのモンブランはアツコ先輩の手前、テーブルの上に落下した。

どちらかのドキュメント部門で通過していれば、と僕だって考えた。二年生は四人だから、そこに正也を入れてもらえたのに、

と。だけど、そんなタラレバを言っても仕方ないということも、二年生の前で絶対に口にしてはいけないということだって、深く考えなくてもわかっている。

アツコ先輩だって、しまった、と思っているはずだ。ケーキを投げられたことに文句を言わないのが、その証拠だ。

「あの、二年はこれから白井のあとを追いかけます。多分、中庭か図書室だと思うので」

そう言つて、シュウサイ先輩が立ち上がった。それから、月村部長の方を向いた。

「二年が思っていることは、白井がほとんど言ったので、あとは残った人たちで決めてください。でも、一つ補足させてもらうなら、がんばったのは宮本だけじゃない。一年生三人で確定して、残り二枠をくじ引きでもして決めればいいんじゃないですか？ 留守番組の方が多ければ、今ほどギクシヤクしないだろうし。じゃあ」

じゃあ、が示し合わせた合図だったかのように、ラグビー部先輩とミドリ先輩も立ち上がり、中途半端に残したケーキの皿をテーブルに置いたまま、放送室を出て行った。

シュウサイ先輩の提案は僕が一番理想とするものだけど、三年生の先輩たちが簡単に受け入れるとは思えない。

アツコ先輩、ヒカル先輩、ジュリ先輩、スズカ先輩が、無言のまま、どうするの？ と訊ねるような顔を月村部長に向けた。部長は少し空に目を遣り、「C」を決したような表情で口を開いた。

「私の代わりに、宮本くん、行ってくれないかな」

えつ、と三年生四人だけでなく、僕も驚きの声を上げてしまった。

「私、実は、お兄ちゃんにJ B Kに連れて行ってもらったことがあるの。だから……」

「やめてください！」

正也は静かに、だけど、力強く遮った。

「僕、東京に行きたいなんて、一度も言っていないんですけど」

正也は月村部長にまっすぐ向き合った。

「だけど……」

部長が口ごもる。確かに、僕も白井先輩も三年生の先輩たちも、正也の気持ちを確認していたわけじゃない。

「そりゃあ、何人でも参加可能なら、喜んで行くけれど、他に行きたい人を蹴落としてまで、とは思ってません。だから、くだらない言い争いを、宮本のために、なんていう理由で続けるのなら、今すぐやめてください」

「でも、いいの？ 本当に」

「僕は東京に行くために『ケンガイ』を書いたんじゃないやありません。どうしても伝えたい思いがあつて、それを応募作として物語にする機会をもらえたから書いたんです。もちろん、それが県大会の予選を通過して、決勝で二位になって、全国大会に行けることになったのは、夢みたいに嬉しかった。だけど、その嬉しさは物語が多くの人に伝わって、もっと多くの人に聴いてもらえるチャンスを得たことに對してで、決して、東京に行けるからじゃない」

正也は落ち着いた口調で語ってはいるけれど、⑥僕は正也の言葉の中に、怒りや悲しみを感じる。そして、僕自身も物語に本当の意味で向き合っていなかったことに、気付かされる。

東京に行かないかもしれないから。

そんなことを氣遣つて、正也に連絡を取らなかったのがその証拠だ。大会終了後、普通に作品の話をすればよかったのだ。『ケンガイ』のこと、他校の作品のこと。

この場でだって、ケーキを食べながら、純粋に『ケンガイ』が評価されたことを喜び合い、反省会をすればよかったのだ。なのに、みんなの頭の中には東京に行くことしかなかった。『ケンガイ』を置き去りにした東京行きなんて、正也にとっては何の価値もないのかもしれない。

それでも……。本当に東京に行かなくてもいいのか？ とまだ思ってしまう。全国から集まった高校生が『ケンガイ』を聴いて

いるときの顔を、見たくないのか？ と。

「それに……」

正也は続けた。

「今年は、僕、行っちゃいけないような気がするんです。ビギナーズブラックであつさり目標をクリアしてしまうと、来年、再来年、行き詰まったときに、まあいいや、って思ってしまうようなんですね。とりあえず、一回、行けたしって」

正也はそう言って、ニツと笑った。そのまま、右手の人差し指で鼻の頭をポリポリとかく。

⑦僕には、正也が自分自身を納得させようとがんばっているようにしか思えない。

(中略)

「宮本くん、本当にいいの？」

月村部長が神妙な面持ちで訊ねた。

「はい。全国大会には、三年生の先輩たちで行ってきてください。僕は今日、こういう話じゃなくて、『ケンガイ』や他の作品の話を、先輩たちとできることを期待していました」

さらりと放たれた正也のひと言に、⑧部長は殴られたかのように顔をゆがめ、俯いた。

部長は部長なりに正也のことを慮り、自分が引いて正也を行かせる、という苦渋の決断をしたのかもしれないけれど、それでも大切なことは見えていなかった。

何をしに全国大会へ行くのか。

Jコンは、田舎の高校生のご褒美旅行のために開催されるのではない。

「ありがとう、宮本くん……」

アツコ先輩が目を見つ赤にして、鼻をぐずぐずとすすりながら言った。先輩たちにも、正也の思いは伝わったようだ。

「お土産買ってくるからね」

続いたヒカル先輩の言葉に、僕はガクツとうなだれそうになった。ほおづえをついていなくてよかった。

何にも届いていない……。こんな人たちが放っておいて、僕たちで東京に行こう。そう叫んでやろうか。

「⑨そういうことじゃないでしょう！」

月村部長が自分の同級生たちの方を向き、言い放った。白井先輩よりも迫力のある、腹の底にドカンと響く声だ。

「宮本くんがJコンに行けば、全国から集まったラジオドラマ作品の、あらゆる長所を吸収して、短所でさえも自作のことにように真剣に捉えて、次の作品に反映させることができるはず。白井さんが行けば、時間が許す限り、他の部門の見学もして、来年のための傾向と対策を分析してくれるはず。町田くんや久米さん、他の二年生、誰が行っても、来年のための何かを得て帰ってくる。そんなチャンス、私たちは譲ってもらったの。私たちはJコンを、少なくとも、Jコンでオンエアされた『ケンガイ』を、ここに持ち帰らなきゃならない。それが無理だと思ふなら、五人の枠すべてを、後輩たちに譲ろう」

結局、Jコンには三年生の先輩たち五人が行くことになった。

(『ブロードキャスト』 湊 かなえ)

〔注〕

*1 J B K Ⅱ 作品中で用いられる放送に関する架空の組織で、通称 Jコンを主催している。

*2 おとといⅡ県大会が行われ、ドラマ部門に出品した『ケンガイ』が第二位となり全国大会出場が決まった。

*3 ケンガイⅡJコンのドラマ部門に出品した、SNS上のいじめをテーマとした作品。

*4 ドキュメントⅠよかったのにⅡドキュメント部門には二年生が二作品出品したが、全国大会へはいけなかったことを受けた発言。

*5 ビギナーズブラックⅡ初心者が幸運にめぐまれて好結果を収めること。

問一 文中の空らん「A」～「C」に漢字を一字ずつ入れて慣用句を完成させなさい。

問二 ―線①「曖昧に部長が頷いた」とありますが、この時の月村部長の様子を「僕」はどのようなものと受け止めていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 全国大会への参加をまるで旅行気分で見ええている三年生の緊張感のなさにいら立つものの、三年生の仲間から孤立することをおそれ、それをこらえている。

イ 全国大会に行く気になっている三年生に、三年生は抽選で二人しか行けないことを告げなければならない立場に追い込まれ、仲間を裏切るような罪悪感に打ちひしがれている。

ウ 全国大会には三年生五人で行けると確信してはしゃいでいる同級生に対し違和感を覚えるものの、それを口にするためにためらいも感じている。

エ 全国大会には一年生の宮本を連れていくべきであるが、それは毎回三年生が参加しているという伝統を覆すことになり、どのように説明すればよいのか悩んでいる。

オ 全国大会には三年生五人で参加すると心に決めたが、同じように全国大会に行きたがっている二年生からの激しい批判の矢面に立つことを覚悟し、緊張している。

問三 ―線②「間違ったこと」とはどのようなことですか。その内容の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三年生が二年生にあてつけるように全国大会の話をしていること。

イ 宮本の活躍が三年生の間で全く評価されていないこと。

ウ 三年生が全国大会時に自由時間を求めてはしゃいでいること。

エ 三年生が自分たちの活躍で全国大会出場を決めたと信じていること。

オ 宮本が全国大会に行かないということが前提となっていること。

問四 ―線③「黙っているのが一番。ズルイやり方だ」とありますが、「黙っていること」が、どのような点で「ズルイやり方」となるのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰かが根負けするのを待つことで、仲間同士の友情をとりつくるまま、自分の思いをかなえようとしている点。

イ 全国大会出場に最も貢献した宮本を東京に行かせるべきだという主張を検討もせず、うやむやにしようとしている点。

ウ 黙り続けることで無駄な時間の経過を周囲に意識させ、周囲に話し合いを持つことを諦めさせようとしている点。

エ 内心では自分さえ東京に行ければいいと思っていながら、仲間を思いやっているという体裁を整えようとしている点。

オ 自分たちが黙っていることで宮本にも何も言わせない雰囲気を作り、自分たちのわがままを正当化しようとしている点。

問五 —線④「そんなふうだから、自分たちだけでは、マトモな作品がつかれないんですよ」、—線⑤「……ドキュメント部門も、どっちか通過していればよかったのに」とありますが、このやり取りの説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 白井先輩は三年生を叱咤激励するつもりで厳しいことを口にしたが、アツコ先輩は自分たちが否定されたと思い、はつきりとに相手を傷つける意図をもって発言している。

イ 白井先輩は全国大会に臨む三年生の態度を非難しており、アツコ先輩はまともに返す言葉が見つからず、今さら言っても仕方のないことを、つい口にしてしまっている。

ウ 白井先輩は三年生の自分勝手な姿勢に怒りを露骨に表しているが、アツコ先輩は上級生としての包容力をもって、それとなく相手の誤りに気付かせようとしている。

エ 白井先輩は相手を論破する目的をもって、論理的に言葉を組み立てているが、アツコ先輩は生意気な後輩に怒りを覚え、先輩としての権威を見せつけようとしている。

オ 白井先輩は正々堂々たった一人で三年生と向き合い論戦を仕掛けているが、アツコ先輩は相手の正論にひるみ、周囲に同意を求めて味方を増やそうとしている。

問六 —線⑥「僕は正也の言葉の中に、怒りや悲しみを感じる」とありますが、「僕」は「正也」がどのような点に「怒りや悲しみ」を抱いていると感じているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 放送部として出品し、評価を受けた『ケンガイ』が、今や東京行きの道具のように扱われている点。

イ 『ケンガイ』に最も貢献したのは自分であるのに、三年生の自分に対する評価が十分になされていない点。

ウ 自分が東京行きを主張すれば誰も反対できないとわかっているから、あえて話をさせないようにしている点。

エ 『ケンガイ』を作り上げたのは自分だということを無視して、皆が東京行きの話題しかしていない点。

オ 『ケンガイ』をより良い作品に仕上げるための反省会が、ケーキを食べながら話すという程度のものになっている点。

問七 —線⑦「僕には、正也が自分自身を納得させようとはがんばっているようにしか思えない」とありますが、「僕」はこの時の「正也」の様子をどのように受け止めていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 放送部がこれからもっと活躍するためにも、全国大会へは三年生が行くべきであると信じ切っている。

イ 月村部長が自分に気を遣って犠牲になろうとしていることが悲しくて、自分が身を引こうとしている。

ウ 自分が未熟であることを自覚して、今年は全国大会を我慢すべきであると、自分を客観的に評価している。

エ 今のくだらない争いを収めるために、一生懸命に自分が東京に行くべきではない理由をこじつけている。

オ 本心は全国大会に行きたいが、一年生として、三年生が気持ちよく全国大会に行けるように遠慮している。

問八 —線⑧「部長は殴られたかのように顔をゆがめ、俯いた」とありますが、この時の「部長」の気持ちを八十字以内で詳しく説明しなさい。

問九 —線⑨「そういうことじゃないでしょう!」とありますが、「月村部長」が「重要なこと」と考えている内容として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 全国大会に出場しやすい作品の傾向をつかんでくること。

イ 全国大会における『ケンガイ』の評価を確認してくること。

ウ 来年の作品のための糧となるものを持ち帰ってくること。

エ 『ケンガイ』を全国大会でしっかりとアピールしてくること。

オ 全国大会に出場する作品のレベルの高さを体験してくること。

受験番号			
1	1		

氏名

得点	※

問一
A
B
C

問二	
問三	
問四	
問五	
問六	

[illegible]

問八

問九

二

問一
A
B
C

問二	
問三	
問四	
問五	
問六	
問七	

[illegible]

問九